

## 東北地方における江戸時代の死亡変動 —菊池万雄氏収集の寺院過去帳を中心に—

人文学部 人間文化課程 文化財論コース  
伊藤薫

### 概要

本研究は、寺院過去帳から見出せる死亡者数や付随情報を分析し、江戸時代における死亡者数の変動や、飢饉や災害といった異常事態が起きた範囲やその規模について探ることを目的とする。寺院過去帳を利用した飢饉の研究は過去になされてきたが、いずれも全国的な視点から分析されたものが多く、東北地方の各藩領・地域に焦点を当てたものは少ない。本研究は、東北地方をおおよそ旧藩領名に基づき 8 つの地域に分け、宝暦の飢饉・天明の飢饉・天保の飢饉についてそれぞれ分析・考察を行った。

寺院過去帳（以下、過去帳）とは寺院によって管理される死者の名簿である。過去帳には死者=被供養者の俗名、戒名、死亡年月日が記されている。場合によっては、被供養者の住所、出身地、死因、享年、職業や、多くの人命が失われた災害や疫病についての記述が残されている。これに対し、藩の記録書のような、文字史料の多くは、飢饉や災害が起きた時の被害の記録など、非日常的な出来事について書かれる傾向にある。過去帳は、あくまで日常的に死亡者の情報を書き記したものである。寺が檀家の死亡者を記載したものという性質上、住職の不在や火災による焼失など、寺院の管理に滞りがない限り、日常的に死亡者が記録されていく。こうして得られる情報に、飢饉について記録した史料などを組み合わせることで、飢饉の被害状況について検討することが可能になる。

本研究を進めるにあたり、菊池万雄氏収集の寺院過去帳データ郡(以下、菊池コレクション)を用いた。菊池コレクションは現在、弘前大学人文社会科学部文化財論研究室にて保管されている。菊池コレクションは 27 都道府県にわたる寺院の過去帳データを有しており、本研究ではその膨大な過去帳データのうち、以下の条件を満たすものを選び利用した。

条件 1：東北地方に位置する寺院の過去帳データ

条件 2：飢饉の周辺年 10 年が欠年なく揃い、かつ飢饉年(宝暦 6 年、天明 4 年、天保 5 年)に先立つ 10 年間の死亡者数の欠年が 1 年以内の過去帳データ

以上の条件を満たす過去帳データを集計し、立命館大学・高木正朗ゼミ『寺院過去帳からよみとる江戸時代の飢饉—GIS を使用した死亡変動分析—』(2005)より、死亡実数・死亡指数を用いた手法を参考にして分析を行った。

宝暦の飢饉について、分析対象とした寺院は弘前藩 1 カ寺、八戸藩 2 カ寺、盛岡藩 6 カ寺、仙台藩 4 カ寺、庄内藩 1 カ寺、合計 14 カ寺である。なお、会津藩、いわき地域、久保田藩については、条件を満たす過去帳データを有する寺院がなかったため、対象外とした。分析対象とした年代は宝暦 1 年(1751)～宝暦 10 年(1760)の 10 年間である。死亡者数の変動について、弘前藩領の寺院では、宝暦 3 年(1753)に小さな死亡ピークを迎えた後、5 年を

底にして6年に死亡者数がピークに達した。7年に死亡者数は落ち込み、その後は安定的に推移していた。このような死亡変動は、八戸藩領や盛岡藩領のほとんどの寺院に当てはまり、宝暦の飢饉において最も標準的な死亡変動パターンであった。一方、仙台藩領の寺院では前述のパターンと異なり、3年から4年にかけての死亡者数の増加が目立った。いずれの地域も共通して宝暦6年の大量死が目立った。これは宝暦5年の大凶作による餓死者が、翌年に数値として現れたものと考えられる。

被害の規模についても分析・考察を行った。弘前藩領の寺院では、宝暦6年に死亡指数値203.5を示した。つまり、平常年に比べ約2倍の死亡者を出したことを意味する。八戸藩領の2カ寺においても、6年は平常年に比べ約2倍の死亡者を出していた。盛岡藩領の6カ寺では、6年は2.5倍～4.4倍の死亡者を出し、弘前藩・八戸藩に比べ被害の程度が大きかった。仙台藩領の寺院では、1.6倍～2倍の範囲に留まっており、他地域に比べ被害は小さかったといえる。また、仙台藩領では宝暦4年の死亡指数に特徴が見られた。この年、他地域では死亡指数は50～110を示すが、仙台藩領においては130～220と高い数値を示している。庄内藩領の寺院では、6年は平常年に比べて1.5倍程に留まり、他の藩に比べて飢饉による被害の影響は少なかったと考えられる。

大量死を記録した宝暦6年は平常年に比べて大きな被害を及ぼしていた。特に盛岡藩における被害が甚だしかったことが数値から明らかになった。北奥州に位置する盛岡藩は、広大な所領を有していたが、そのほとんどが山林原野を占めていたため、耕地が少なく、その耕地ですら生産力の低い状態であった。当時、盛岡以北は水稻経営の限界地帯であり、気象条件や農業技術の未発達さとあいまって、畑作より田作を中心に凶作が度々襲った(細井、2011)。こうした状況から食料が欠乏し、多数の餓死者を出したといえる。

天明の飢饉について、分析対象とした寺院は弘前藩1カ寺、八戸藩3カ寺、盛岡藩8カ寺、仙台藩9カ寺、会津藩10カ寺、いわき地域2カ寺、庄内藩3カ寺、合計36カ寺である。なお、久保田藩については条件を満たす過去帳データを有する寺院がなかったため、対象外とした。分析対象とした年代は天明1年(1781)～寛政2年(1790)の10年間である。死亡者数の変動について、ほぼ全ての寺院で、天明3年(1783)から4年(1784)にかけて急激に死亡者数が増加し、同年に死亡ピークを迎え、5年に死亡者数が激減した以降は大きな変動は見られない傾向にあった。

被害の規模については、弘前藩領では、天明4年に死亡指数値798.1を示し、平常年に比べ8倍近い死亡者を出している。八戸藩領においても同年は8倍～9倍に近い死亡者を出していた。一方、盛岡藩領では3.6倍～9.6倍と寺院によって差が見られた。分析対象とした8カ寺のうち、平常年に比べ8倍以上の死亡者を出したのは2カ寺であった。仙台藩領においても1.6倍～11.2倍と差が見られた。藩内の最大死亡指数値は1121.6と、他の地域の中でも群を抜いていた。平常年に比べて8倍以上の死亡者を出した寺院は9カ寺のうち2カ寺であった。このように仙台藩領以北の太平洋側地域では高い値を出したのに対し、会津藩では2.4～4.6倍、いわき地域では2.5倍、庄内藩では0.8倍～1.8倍と8倍以上を示し

た寺院はなかった。特に庄内藩では、平常状態以下を示す、死亡指数が 100 を下回る寺院が 2 ヶ寺確認され、飢饉の影響は数値から見られなかった。天明の飢饉は、地域によって被害の差が大きく、とくに北東北太平洋側地域において甚大な被害を及ぼしたと推測される。

天保の飢饉について、分析対象とした寺院は弘前藩 2 ヶ寺、八戸藩 4 ヶ寺、盛岡藩 12 ヶ寺、仙台藩 18 ヶ寺、会津藩 12 ヶ寺、いわき地域 2 ヶ寺、久保田藩 2 ヶ寺、庄内藩 7 ヶ寺、合計 59 ヶ寺であった。分析対象とした年代は、天保 2 年(1831)～天保 11 年(1849)の 10 年間である。死亡者数の変動について、地域によって死亡ピークを迎える年次に差が見られた。日本海側に位置する久保田藩領の寺院は 5 年の大量死が目立った。八戸藩・仙台藩・会津藩・いわき地域については 8 年の大量死が目立ち、5 年と 8 年の両年大量死が確認できたのは、弘前藩・盛岡藩・庄内藩であった。また、八戸藩領や盛岡藩領の一部の寺院など、東北地方太平洋側に位置する地域では、天保 8 年から 10 年にかけて高い水準で死亡者数が推移していた。これらの地域では、飢饉の影響が長期間に及んでいた。

被害の規模について、弘前藩領の寺院で天保 5 年は平常年に比べて 1.9 倍から 2.2 倍の死亡者を出しているが、8 年には平常年の 3 倍に増えていた。八戸藩の 4 ヶ寺はいずれも 5 年は平常年に比べて 2 倍以下を示すが、8 年から 10 年にかけて死亡指数が高い水準を維持している。藩領内で最も高い死亡指数値を示したのは 8 年の 422.0 で、平常年に比べて 4.2 倍もの死亡者を出していた。盛岡藩領の寺院では、5 年・8 年には最大で平常年の 4 倍、9 年には 4.4 倍、10 年には 4.7 倍の死亡者を出している。仙台藩領のある寺院では天保 8 年に死亡指数値 1620.7 を示し、平常年に比べ 16.2 倍もの死亡者を出すなど被害が甚大であった。この値は分析対象となった寺院の中で最も高かった。仙台藩領内で天保 8 年に平常年の 4 倍を超えた寺院は 8 ヶ寺であった。会津藩・いわき地域においても、天保 8 年に平常状態以上を示している。

久保田藩領の寺院では、天保 5 年に平常年に比べて 3 倍近い死亡者を出した。前年の 4 年は大凶作の年であり、特に出羽側の被害がひどかった(菊池勇夫、2000)。久保田藩ではこの翌年の 5 年に疫病が流行して 5 万人余りが亡くなったといい、大量死の原因であると考えられる。庄内藩領の一部の寺院では、大量死が見られた 5 年と 8 年以外に、9 年・11 年にも死亡指数 200.0 以上を示した寺院が見られたが、その原因は不明である。

以上、本研究では具体的数値に基づいて各飢饉の被害状況を明らかにしてきた。従来の研究結果と同様、宝暦の飢饉・天明の飢饉は短期間に集中して死亡者を出したのに対し、天保の飢饉では、長期間かつ慢性的に飢饉の被害が及んでいたことが本研究においても認められた。しかし、被害規模については、藩政による同一の飢饉対策が行われたはずの藩領内でも大きな差があったといえる。

【引用・参考文献】

- ・青木大輔（1967） 『寺院の過去帳からみた岩手県の飢饉』 奥羽史談会
- ・一関市博物館（2002） 『民間備荒録 江戸時代の飢饉と救荒書』 一関市博物館
- ・荒川秀俊（1979） 『飢饉』 株式会社教育社
- ・葛西松四郎（1980） 『津軽ケガジ物語』 小野印刷
- ・菊池勇夫（1994） 『飢饉の社会史』 校倉書房
- ・菊池勇夫（2000） 『飢饉 飢えと食の日本史』 凸版出版株式会社
- ・菊池勇夫（2003） 『飢饉から読む近世社会』 校倉書房
- ・菊池勇夫（2008） 『国宝大崎八幡宮仙台・江戸学叢書 16 仙台藩と飢饉』 大崎八幡宮
- ・菊池万雄（1968） 『近世村落の歴史地理学的研究 岩手、宮城、福島、群馬、埼玉、東京、長野の例より』 鈴木文江堂
- ・菊池万雄（1980） 『日本の歴史災害 江戸後期の寺院過去帳による実証』 古今書院
- ・鬼頭宏（1998） 『もう一つの人口転換—死亡の季節性における近世的形態の出現と消滅』 『上智経済論集』 上智大学経済学会
- ・鬼頭宏（2001） 『歴史人口学のフロンティア』より『日本の歴史人口学』 東洋経済新報社
- ・鬼頭宏（2007） 『人口で見る日本史』 講談社学術文庫
- ・工藤祐董（1999） 『八戸藩の歴史 八戸の歴史双書』 八戸市
- ・黒石市教育委員会(1990) 『市民の歴史Ⅱ 妙経寺の過去帳～幕末以前の死者数分析保酷暑～』 津軽新報社
- ・黒滝十二郎（1997） 『弘前藩政の諸問題』 北方新社
- ・国史大辞典編集委員会（1988） 『国史大辞典 第9巻』 pp.1022-1023、p.1031 吉川弘文館
- ・国史大辞典編集委員会（1991） 『国史大辞典 第12巻』 p.660 吉川弘文館
- ・白戸紗椰(2017) 『日本海地域の寺院過去帳から見る近世の人口動態～菊池万雄コレクションを用いて～』
- ・須田圭三（1987） 『過去帳資料による天保飢饉惨状の民族衛生学的研究』 『日本の風土と災害』 古今書院
- ・加藤英明、須田圭三(1991) 『往還寺檀家における過去帳資料と宗門改帳の比較』 『民族衛生』 57巻 第4号 p.170-p.175 日本民族衛生学会
- ・関口慶久（2004） 『近世東北の「家」と墓—岩手県前沢町大室鈴木家の墓標と過去帳—』 『国立歴史民俗博物館研究報告』 第112集『地域社会と基層信仰』 p.465-p.483 国立歴史民俗博物館
- ・関根達人（2003） 『津軽十三湊 湊迎寺過去帳の研究』 弘前印刷株式会社
- ・関根達人、渋谷悠子（2007） 『墓標からみた江戸時代の人口変動』 『日本考古学』 第24号 p.21-p.39 日本考古学協会
- ・関根達人（2010） 『近世墓と人口史料による社会構造と人口変動による基礎的研究』 川崎

印刷株式会社

- ・中澤忠雄、中澤良英（1979） 『過去帳による山梨県住民の死因に関する疫学的考察』『公衆衛生』 医学書院
- ・豊島勝蔵（1980） 『津軽の飢饉史』 森田村古文書研究会
- ・ピエール・グベール 遅塚忠躬・藤田苑子訳（1992） 『歴史人口学説』 岩波書店
- ・速水融（2002） 『近代以降期の人口と歴史』より『歴史人口学—課題・方法・史料』 ミネルヴァ書房
- ・細井計（2011） 『盛岡藩宝暦の飢饉とその史料』 東洋書院
- ・高木正朗編（2005） 『寺院過去帳からよみとる江戸時代の飢饉—GIS を使用した死亡変動分析—』 p.7 立命館大学産業社会学部高木ゼミナール
- ・山本起世子（2006） 『天明飢饉期・東北農村の人口変動と死亡構造—仙台領 3 箇村の事例』『立命館大学人文科学研究所紀要』 87 p.133-p.160 立命館大学人文科学研究所
- ・渡辺信（1998） 『山形県の歴史』 山川出版社